

事例③

【相談者】

居宅介護支援事業所の介護支援専門員。自身の担当するケースへの対応について相談に来所。

【ケース】

68歳の一人暮らしの男性で生活保護受給中。別れた妻と子供が2人いるが、連絡は取っていない。2階建て木造アパートの2階に住む。近所に72歳の実兄一家が住むが、「弟が死んだ時は骨を拾うが、今は何も援助できない」と宣言している。脳梗塞後遺症で左半身に軽度の麻痺があり、要介護1の認定を受けている。半身麻痺と言ってもアパートの外階段の上り下りに支障はない。

元気な時は、気の向くままに外出しているが、家で日本酒を一人で飲み続け、栄養不良状態になって、電話で兄に助けを求め、兄が生活保護担当現業員に連絡し、生活保護課で市内の内科医療機関に入退院を繰り返している。

【支援の状況】

前々回の退院時に要介護1を取得し、入院先の内科医療機関の依頼で、担当を引き受けて半年になる。規則正しい食生活が必要と医療機関から助言されたので、週2回の通所介護と週2回の訪問介護を導入した。支援が始まって、最初の2か月くらいは何も問題はなかったが、やがて通所介護に通う他の高齢者が文句ばかり言っていて気に食わないとか、通所介護の責任者が、自分を汚い物を見るように見て差別すると言うようになり、通所介護に通わなくなった。訪問介護は掃除と食材の買い出しで入っていたが、本人は部屋を散らかし放題になり、本人が自分で自動販売機に酒を買いに行き、飲酒を再開した。（ヘルパーには、たとえ本人が酒類の購入を依頼しても拒否するよう指示を出していて、遵守されている）

ここ1週間では飲酒量が増えて、アルコール以外は口にしていない様子。

酒を吞んでは万年床に横になり、失禁をしている事も頻回になっている。

今後について受診を提案するが「俺はいつ死んだって構わない」と言って、話を聞かない。生活保護課に相談すると「また自分から電話してきて入院になりますから」と冷めた返事があった。

【相談内容】

このような自業自得と思える利用者を担当することに、自分は嫌になっていて、放置しようかと思うこともある。しかしそれは利用者の人格を否定することでもあるので、ますますそのジレンマに悩んでいる。